書評

飯田隆『虹と空の存在論』
（ぷねうま舎，2019年刊）

本書は「虹は出来事である」という大胆な主張とその正当化を中心とする第1～4章と「空」の存在性格を分析する第5章から成る．本書の特筆すべき一つの特長は，哲学史・存在論・知覚論・言語哲学・科学哲学等の多彩な哲学的分野のみならず科学史・文化史・文学等にまで及ぶ広範な考察が，高水準で融合的に展開されていることである．そして何よりもその最大の功績は，これまで殆どの哲学研究者が目もくれなかった「虹」と「空」という日常的対象が興味深い存在論的考察の主題となりうることを示し，「気象の存在論」とでもいうべき魅力的な研究領域を開示したことにある．

私は幸運にも，このような飯田の研究が「公共的出来事」として発生した講演の現場に居合わせて触発され，その後虹を主題とする論文を二本書いた．私がこの書評を担当するのは恐らくそうした事情に由来し，また本書中の広大な考察領域を取扱う力量は持ち合わせていないので，以下では専ら「虹の存在論」に書評の焦点を絞らせていただく．

冒頭で氏の主張が「大胆」だと述べたが，その理由は（氏の認識に反して）これまで「虹は出来事だ」と主張した者は恐らくいないと思うからである．アリストテレス，デカルトらが果たして具体的個体としての「出来事」というカテゴリーを認定していたか，という問題は措くとしても，後述するように彼らがそのような主張をしていたとは私には思えない．また，そのような主張を行った現代の哲学者として氏が唯一名指しているスクリュートン（p.158-9）にしても，私の読解では，彼は虹を「無基盤的（ungrounded）」という意味での「純粋な（pure）」何ものかの事例としては想定しているが，その「何ものか」を（彼が解釈する限りでの）音のような「出来事」だとまでは主張していない．そのことは，彼が虹を光として捉えながらも出来事的な「波」ではなく「無基盤的傾向性」としての「光子」になぞらえていることからも明らかである．光子はどちらかと言えば粒子という「物」であり，また傾向性も性質ではあっても決して「出来事」ではない．

飯田の大胆さを得心していただくために，まずは氏の主張の要諦をしっかり確認しておこう．

第一に，氏が想定している「出来事」とは「もの」の一種としての「対象個体」と対比される「事象（こと）」の一種としての「出来事個体」である（p.61）．氏は「出来事個体」と述べない理由を「『出来事』については『対象』のような多義性がないので」と述べているが（p.225註2），私見では，まさしく「対象」に多義性があるがゆえにこそ「個体」を省略すべきではなかった．というのも，氏自身がフレーゲ的用法として紹介しているように（p.221）往々にして「対象」は「個体」という意味で用いられるので，氏が「虹は対象個体ではない」と述べるときに否定さ

れているのが虹の「もの性」ではなく「個体性」であるかのごとく錯覚されがちであると同時に，「虹は出来事だ」という氏の主張は「個体」に関してなされているということが忘れられがちだからである．そこで以下では，両者を「物個体」と「出来事個体」という形で対比させることとする．

第二に，もう一つ氏が行っている重要な区別は「現象的存在」と「実体的存在」の対比である．氏は前者の特徴（後者の特徴はその否定）を二つ挙げているが，ここでは以下の論旨に関係する「誰か，あるいは何かに現れる（現象する）ことによってのみ存在する」(p.113) という特徴のみに着目すると，この対比は直接的には観測者依存性の有無に関する区別であって存在論的「カテゴリー」の区別ではない．そのことは，氏が両者を「存在」というカテゴリー中立的な語を用いて表していることにも明らかである．したがって，個体に対して先ほどの区別を適用するならば，少なくとも原理的には「現象的物個体」「現象的出来事個体」「実体的物個体」「実体的出来事個体」という四種類に分類できることになる．

そしてこれらの点は，氏が採用する「現象」と「実体」の対比が，哲学のとある文脈では自然かもしれないが日常的・科学的文脈では（そして時に哲学的文脈でも）むしろ異例である可能性を示唆する．というのも，これらの文脈では「現象」「実体」のいずれも観測者独立的に捉えたうえで，発光現象・超伝導現象等の「こと的」存在者と物体・素粒子等の「もの的」存在者とのカテゴリー的対比を表す場合が多いと思うからである．

以上のような確認を踏まえて私が飯田による虹の存在論に関して抱く主な疑問は，次の二つである：

(1) 氏は，「あの虹」等の語によって指示される個体を従来とは異なる個体に変更すべきだという改訂主義的「提案」を行っているのか，それとも従来の指示個体を維持したうえでその個体の「分析」を行っているのか？
(2)「知覚される世界から客観的実在へ」と向かう自然科学的探究の結果，虹が「物個体」から「出来事個体」として捉えられることになったという氏の見方は適切だろうか？

これらの疑問の要点を理解していただくために，不遜ながら，氏の虹の捉え方を私自身の虹の捉え方と対比しつつまとめてみると，次のようなこととなる：

〈飯田〉虹という物個体は実在しない．なぜなら，そのような「物」は（存在論的）錯覚の所産だからである．実在するのは，虹という（無数の出来事個体から構成され，短期間に広範囲で生じる）「複雑な（公共的）出来事個体（およびその構成要素としての雨滴の集団・太陽光線・正常な観察者等）」である．(p.72)
〈加地〉虹は実在しない物個体である．なぜなら，そのような「個体」は（存在論

的）錯覚の所産だからである．実在するのは，（光線の反射・屈折等によって）虹という物個体の錯覚を観測者に引き起こす「水滴という物個体の集団」であり，（錯覚された）虹は観測地点と相対的に定まる「水滴集団の部分」に位置する．

疑問 (1) については，虹についての飯田のこのような主張内容や「虹の知覚に共通に現れる七色の光のアーチ」(p.120)，「日常の語法とは異なる」(p.225 註 5）等の表現に鑑みる限り，氏は改訂的提案をしていると思われる．氏がそのような提案を行う一つの理由は，改訂によって観測者たちが厳密な意味で「同じ虹」を見たと言えることになるからである (p.72)．確かにそれは一つの利点であるが，多くの代償も伴う．例えば，もはや虹自体は七色でもアーチ型でもなくなるし，「虹が二本出ている」等とも言えなくなる．

氏が主張するように，「七色の光のアーチ」は観測地点次第で見えている位置が厳密には違うので「数的に」同一だとは言えない．しかし虹の重要な特徴の一つは，同時に見えている限りどこからでもほぼ同じ色・形・大きさで見えるということである．本来の虹のそのような「質的」同一性こそが「同じ虹を見た」ということの実質を十分に表しえており，あえて「虹」という語の用法を改変してまで厳密な意味での虹の数的同一性を確保しなくてもよいのではないだろうか．

飯田の提案の第二の問題点は，アリストテレス，デカルト，ニュートンらが想定していた「個体」がそのような改訂的な意味での虹だとは全く思われないということである．彼らが想定していた虹はあくまでも「七色の光のアーチ」だろう．そのような虹が空の彼方に発生するという自然「現象」は太陽から水滴集団を経て観測者にまで至る光線のどのようなプロセスの結果として生ずるかということを彼らは科学的に解明したのだが，だからと言ってそのプロセス自体が虹だと主張しているわけではないだろう．実際，氏が p.52 に掲載しているデカルトの『気象学』の挿絵をデカルト自身に示して「どれが虹なのか」と尋ねれば，そこに描かれている二本のアーチを指さすだろう．

さらに言えば飯田自身についても，特に虹の知覚について論ずる文脈で，現象的存在である七色のアーチは虹という出来事個体の＜見え＞である，と主張している際の「個体」は（色はともかく）少なくとも「アーチ型」の出来事だと思われる．氏は雷と同様に出来事個体としての虹も色を持つと主張するのだが，それらの出来事が色を持つのだとしたら，雷の形がぎざぎざの直線であるように，その場合の虹の形はアーチ状だということになるだろう．仮にその場合にも氏が改訂的な意味での複雑な公共的出来事個体としての虹全体がアーチ型で見えていると主張しているのだとしたら，それは誤りだと私は思う．なぜなら，各観測者が見ている虹の位置は，その観測者を中心点として一定角度の範囲内で広がっていくアーチ型と水滴集団が交わる断面的部分として特定できるからである．デカルトらはその部分においてどのようなことが起きているかを解明したのであり，また，七色のアーチが出来

事個体の見えなのだとすれば，あくまでもその部分で生じている複雑な出来事個体の見えなのである．

もしも氏が意図している虹が今示したようなアーチ状の「実体的」出来事個体だとするとそれは無数の可能的観測位置に対応して無数に「実在」することになってしまうので，もはや一つ二つと数えられる「個体」だとは言えないだろう．また，移動しつつある特定の観測者によって見られている虹は四次元的延長を持つ一つの延続的出来事個体ということになるだろうから，（四次元主義者の意味でではあるが）虹が「移動する」ことになってしまうだろう．

そして飯田に対する以上の疑問 (1) は，自然に次の疑問 (2) に連なっていく．氏は「対象個体に虹をなぞらえることが，洋の東西を問わず広く行われてきたことは，本書のはじめで見たとおりである．アリストテレスに始まり，デカルトとニュートンで一応の完成を見る，虹の科学的説明においては，虹は繰り返し生じる出来事としてとらえられている」と主張している（p.66）が，虹を物個体になぞらえていたとしてもそのような虹が発生するということ自体は「繰り返し生じる出来事」として捉えられていただろう．科学的解明によって判明してきたのは，第一に＜そのような出来事に参与している（広義の）「物」が，一見して思われるようなアーチ状のマクロ的「物体」ではなく水滴というミクロ的物体の「集団」であること＞，その次に＜そのような出来事は光線を一定の角度で反射させたり屈折させたりする各水滴の力能に起因すること＞，さらには＜虹が七色の帯となるのは，水滴が光の波長に応じて分光させる力能を持っているからだ＞というように，むしろ公共的「現象」としてのその出来事（個体）の背後にある「実体的」（物）個体の正体と力能をより明確化していったことなのではないだろうか．水滴の大きさ次第で虹の色や寿命がどう変わるか，幻日虹・花粉光環等の類似現象をもたらす氷晶・花粉等と水滴の仕組みはどう異なるのか，といった科学的研究は，いずれも氷晶・花粉・水滴等の物個体に関する研究でもあるだろう．

以上の理由により，私自身は飯田の大胆さについていけないところが大きい．とはいえ，私に誤解や混乱があるのかもしれないし，実は氏と私の主張に大差はないのかもしれない．実際，多くの者にとって（ひょっとしたら氏にとっても）上のような論争は「（とても小さな）コップの中の嵐」の典型のように思われるだろう．しかし，私自身は虹の存在論が「小さな」主題（p.238）だとは思わない．そして哲学の世界のとても小さな住人としては，このような魅力的な空間を創出してくれた氏に感謝して止まないのである．

（加地大介）